

文化変容過程における台湾タイヤル族中学生の適応 行動に関する研究

崔, 修麗

<https://doi.org/10.15017/2236705>

出版情報 : 九州人類学会報. 16, pp.53-62, 1988-07-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

『文化変容過程における台湾タイヤル族 中学生の適応行動に関する研究』

崔 修 麗

はじめに

本稿は、九州大学大学院教育学研究科において、昭和62年度に提出した修士論文の要約である。

この論文をまとめるにあたっては、指導教官である丸山孝一教授からいろいろな助言と教示を下さった。また教育文化人類学研究室の慶田勝彦助手と片山隆裕前助手並びに研究室の級友たちには協力と助言を頂いた。フィールド・ワークに当っては、中華民国国立中央研究院民族学研究所の李亦園前所長、刘斌雄所長、胡台麗教授に助言と教示を賜った。また、台北県県庁、烏来郷役所、烏来国民中小学校及びたくさんのタイヤル族の人々から小論に援助して頂き、この場を借りて、深くお礼を申しあげる。

一. 研究目的及び方法

古来より台湾に住んでいる民族は「高山族」、「山地同胞」、「先住民」と呼ばれ、後16, 17世紀から経済的、政治的な理由で中国大陸から台湾に来て、そのまま台湾に定住するようになった人々は「漢民族」と名づけられた。

小論の目的は文化変容の過程において、台湾に住んでいる少数民族 — タイヤル族が、マジョリティとしての漢民族と接する際に、生じる適応行動を明らかにすることである。タイヤル族と漢民族とは、文化的に異なる点が多く、マイノリティとしてのタイヤル族が漢文化と接触する際には、いろいろな問題が生じている。それゆえに、彼らの適応行動の研究は少数民族の教育研究にとって、重要な課題だと思われる。小論文はタイヤル族中学生を対象に、フィールド・ワークをもとに作成されたものである。具体的には、伝統的文化背景、生活様式が漢民族と異なったタイヤル中学生が、いかなる形で漢文化に適応しているかを明らかにしたい。

研究方法としては、文献研究、フィールド・ワーク、質問紙調査などを実施した。この漢文化への適応を明らかにするためには、まず漢文化での少数民族の位置づけ、及び調査地である烏来の特異な概況を通して、変容しつつあるタイヤル文化の特徴を述べておく必要がある。また、教育と文化の関連を重視するため、まず中学生の生活の中心である学校と家庭教育から考察を進める。そして、言語、友人関係、伝統文化に対する彼らの考え方を通して、タイヤル中学生の民族的アイデンティティを考慮する必要もある。以上の問題設定のもとに、彼らを取りまく危機的状況を見出すことが可能である。このような文化変容の過程におけるタイヤル中学生の適応行動に関する研究は、今後の少数民族の教育研究に役立つと考えられる。

二. 文化変容における少数民族

(一) 文化変容について

文化変容の概念はレッドフィールド (R. Redfield), リントン (R. Linton), ハースコヴィツ (M. J. Herskovits) らの文化変容委員会で行われた定義によれば, 「異なった文化を持った個人の諸集団が持続的な直接接触を行って, 何れか一方, または両方の元の文化様式に変化を起す場合に起る現象¹⁾」を意味する。今日タイヤル文化と漢文化とが接触する際に, 以下三つの文化変容としての要素が考えられる。

1. 異なった文化様式の接触である

タイヤル文化と漢文化はそれぞれ違う文化様式を持っている。

2. 持続的な直接接触がある

特に植民地時代の終結以降, 絶えず文化の直接接触が行なわれている。例えば, 様々な経済, 政治的な活動でタイヤル文化と漢文化の繋がりはより深くなっている。

3. 集団の元の文化様式に変化が生じた。

長い間にも亘って, タイヤル文化と漢文化が接触することによって, タイヤル文化に大きな変化が生じてきた。例えば, 経済生活, 親族組織に大きな変化が見られる。

(二) 台湾の漢文化における少数民族の位置づけ

台湾での九つの少数民族は, 中華民国政府の民族融合の政策で, 同じ中華民国の国民ではあるが, 伝統的な文化を持っている集団だと見なされている。事実, 少数民族は憲法によって, その地位を明確に保障されている。中華民国憲法における少数民族の地位は以下の通りである。

1. 憲法168条「国家は国境に住んでいる各民族の地位を, 合理的に保障すべきであり, また, その地域の地方自治に, 特別な補助をすべきである²⁾」
2. 憲法169条「国家は国境に住んでいる各民族の教育, 文化, 交通, 水利, 衛生及びほかの経済, 社会事業を積極的に推進し, また補助すべきであり, 土地使用については, その気候, 土壌の性質と人民の生活習慣により保障し, 発展させるべきである³⁾」

憲法のほかに, またその他にいろいろな山地政策がある。特に, 台湾社会における民族の不平等を減らすための優先政策も数多くある。例えば, 経済, 政治, 社会教育, 学校教育など側面において, 優先政策を作って, 少数民族の利益を保障している。

三. 調査地烏来郷の概況

烏来は台北市の東南の方から約27キロ離れている。全面積は321.45平方キロメートル, 台北県の一番大きい郷である。経済の中心は農業, 林業, 観光事業である。今日の烏来におけるタイヤル文化は, 以前のような神秘的な色彩に染められたタイヤル文化ではなく, むしろ文化変容過程において, 新しく変化しつつあるタイヤル文化の姿である。具体的に言えば, 特に経済生活, 宗教信仰, 親族組織に大きな変化が見られる。

(一) 経済生活における変化

今日、烏来の経済生活は農業、漁業、林業、観光事業などから著しく発展している。これは植民地時代以前の農耕・狩猟で生活を営むのと違って、都市化されるにつれて、漁業、観光事業から多元的経営に移行し、都市化と歩調を合わせるように、経済生活を営んでいるのである。特に観光事業と漁業では、漢民族と比べて遜色のない発展を遂げているのである。例えば、タイヤル族が株主の山胞会社は、山地歌舞演芸劇場と民俗博物館を経営し、烏来の観光事業を発展させると同時に、タイヤル文化の伝承においての責任をも自ら担っている。漁業においては、烏来特産の福山魚、鮎、鱒など収益の魚類を中心に収穫し、販売している。

(二) 宗教信仰における変化

日本の植民地であった時代とそれ以前の時代には、烏来の人々の宗教は祖先崇拜であったが、今日では主にキリスト教に変わってきた。今、烏来村に住んでいるタイヤル族の約98%はキリスト教徒である。

(三) 親族組織における変化

親族制度については、今日でもやはり昔のままの父系中心が主流をなしている。この点については、かつてからの変容は極めて少ないのである。

今日では昔のような部落、頭目、長老などの社会制度がない。変って、郷役所、保健所、警察の分駐所、郷民代表大会（議員）などの制度が行われている。しかし、昔の頭目の家族は今でもタイヤル族の人々に尊敬されている。

タイヤル社会の家族における社会的機能は社会の歴史的な変容につれて、変化を遂げてきた。つまり、家族は生産単位と同時に、消費、教育、扶養、宗教の機能を担う集団として存在しているということである。

四. タイヤル中学生の学校教育

(一) 概 況

烏来国民中学校は山地学校である。1987年現在、全校でタイヤル生徒73名、漢民族生徒42名であった。⁴⁾ 授業科目と週時間配当は、文部省のカリキュラム基準によるものである。文化の要素の一つは次の世代へ伝達するものであるもので、教育の場で教師はこの責任を担っている。特に本校のようなタイヤル族と漢民族とが共学している山地学校にとって教師は学習の指導者であると同時に、文化の伝達者の役割をも演じている。本校の教師にとって、その役割は授業においては、学生に学習の指導をすることである。文化の伝達としては、中華文化を伝達するほかに、地元のタイヤル文化をも伝達している。

タイヤル文化の伝達としては、例えば、全国的、あるいは全県的に、学校の踊りと歌の対抗のコンテストがあるのだが、本校の出し物はいつも山地踊りと山地歌である。学校の教師はこれらの競争を訓練するために、タイヤル族の民族舞踏を教えるほかに、踊りの内容がタイヤル文化の一つであるタイヤル神話と関連しているということも教えなければならない。また、試合する時には、今日だんだ

ん消えつつある民族衣裳を着る。以上からコンテストから公演する時に、自分はタイヤル族でなくても、漢民族教師の担っている文化の伝達者としての役割は、極めて大きいと考えられる。

教育は人類及び各民族の文化遺産の基礎を系統的に若い世代に伝えることであると言われている。つまり、過去及び現在における人間の努力の結晶としての文化財は教育の場面で、教師を通し、世代から世代へ伝達されていくのである。

(二) 教室内の民族間対立

本校では「民族別による摩擦は極めて少ない」と言った教師がいる。表面的に見れば、これは教師がずっと生徒に強調している「タイヤル族と漢民族は全部中国人で、皆は兄弟」という民族性、国民性の二重のアイデンティティが形成されているからだと考えられる。しかし、筆者の調査では、本校のタイヤル中学生は、民族的、国家的アイデンティティを有しているが、民族間対立が顕在化することもある。

五. タイヤル中学生の家庭教育

(一) 両親の学歴及び職業概況

家庭教育を通し、親のしつけや考え方によって、文化を無意識のうちに、子どもは身につける。家庭教育は両親の学歴背景、職業背景と深く関連があると考えられる。調査対象であるタイヤル中学生では、小学校卒の父親は五割ぐらいを占め、母親の場合は約八割ぐらいとなる。また、父親の職業は未熟練労働が一番高い比率を占めていて、母親の職業は小売店店員が一番多い。

(二) 家庭教育の概況

人間は家庭でもまれ、そしてここで育てられる。家庭教育の主な役割は、親から子どもへの文化伝達である。人間の文化を比較する時、家族による教育は重要な意味を持っている。両親の日常生活でのしつけは、知らず知らずの間に、子どもに教育的作用を果している。

烏来のタイヤル族社会における家庭教育をより深く理解するために、小論は教師、両親、中学生の立場から、それぞれ見た家庭教育を再検討した。総じて言えば、中学生の適応に関する今日烏来のタイヤル族における家庭教育では、「両親の学歴の低さ」、「親が酒を飲みすぎる事」、「順其自然—自然のままに任かせるという民族性⁵⁾で子どもにあまり期待しない」などの問題点があると考えられる。

このほかに、父母が通過儀礼と年中行事を通し、果した教育的役割をも見逃すことができない。例えば、今日では昔のような種播き、豊年祭、収穫の儀式などは行なわれていない。ただ、年輩の人たちの記憶に残っていて、思い出の形で若者に伝えている。通過儀礼と言っても、今は昔のような入れ墨の成人式は行なっていない。しかし、今の80才代以上の人は入れ墨をしている。青い線で顔に鮮明な入れ墨をしている年寄は、烏来によく見うけられる。漢民族など外来者にとっては珍しいのであるが、タイヤル族にとっては民族のなごりとも言えるだろう。年中行事と入れ墨のような通過儀礼を通して、若い世代に先祖の物語を語るのが、家庭教育が文化の伝達において果す教育的機能である。

六. タイヤル中学生の民族的アイデンティティ

タイヤル中学生の内面には、中国人としてのアイデンティティとタイヤル族としての民族的アイデンティティが二重に形成されていると考えられる。タイヤル民族アイデンティティはいろいろな要素から成り立っているが、ここでは中学生のアイデンティティの形成において、もっとも重要な役割を果たしていると考えられる次の三つの要素について、考えたいと思う。

(一) 言語

タイヤル語は文字を持たないので、現在言語の伝承はスムーズに行われていない。今日烏来のタイヤル社会ではタイヤル語の使用率はだんだん低くなっているという。筆者はフィールド・ワークした時に、殆どの人が家では北京語を話していたと感じた。特に核家族の家はあまり話さないが、三世代の親族から構成された家の場合は二世代の場合より、より多くタイヤル語を話していると感じた。

中学生にとって、学校で漢人とコミュニケーションする時に、タイヤル語が登場することは殆どない。タイヤル族同士がコミュニケーションする時でも、タイヤル語が登場することは少ない。家に帰っても、タイヤル語が登場することは少ない。これによって、祖父母の世代とコミュニケーションする時に、何らかのギャップがあることが予想できる。

また、アンケート調査から明らかにしたのは、現在では核家族の増加に伴って、タイヤル語は次の世代へ伝達されにくくなっているのではないかと考えられることである。

(二) 友人関係

友人関係は、生徒の学校生活における重要な関係として注目される。特に中学生にとって、生活の重点は仲間のグループにあり、仲間は彼らの心の内で、大きな比重を占めている。本校は普通の中学生と異なり、二種類の民族の共学する学校であるので、人間関係においても、ほかの学校と比べた場合より複雑であろうと予測される。特に彼らにとっての友人関係には、民族別による微妙な気持ちも入っていると考えられる。例えば、「あなたが今一番信頼できる友だちは何族ですか」という質問に対し、その結果は以下表1の通りである。

表1 信頼できる友だちの民族別

性別	1. タイヤル族		2. 漢民族		3. その他		計
	タイヤル	漢	タイヤル	漢	タイヤル	漢	
男	19	2	2	10	0	0	33
女	25	1	0	11	0	1	38
計	44	3	2	21	0	1	71

タイヤル族の46名の中に、44名(96%)の圧倒的な人の信頼できる人もタイヤル族で、僅か2名(4%)が信頼できる人として、漢民族を選んだ。その理由として、以下の二つの理由が考えられる。

1. 居住地

本校のタイヤル族と漢民族とは、同じく烏来に住んでいるが、それぞれ住んでいる地域は違う。例えば、烏来村を例として説明すると、烏来駅の近くの商店街に住んでいる人は漢民族を中心とし、山地部落に住んでいる人はタイヤル族を中心としている。居住地域が違うので、生徒たちは民族ごとに、いっしょに学校に行き、あるいはいっしょに家に帰ることとなる。これによって、同じ民族の生徒はよりよく多くの交際のチャンスが生まれることになる。

このように、ある生徒は「授業が終わってから、タイヤル族の人はタイヤル族の友だちといっしょにタイヤルの住んでいるところに帰って、漢民族は漢民族の友だちといっしょに漢民族の住んでいるところに帰る。知らない間に、自分の仲間、いい友だち、あるいは信頼のできる友だちは、自分と同じ民族の人になったのです」と語った。

2. 言語

言語の違いが友人関係の形成に、重要な意味を持つと考えられる。あるタイヤル族の生徒は、授業のほかにもし自分がタイヤル語を使えば、相手（漢民族）が分らないし、もし相手が台湾語を使ったら、今度は自分がさっぱり分らなくなるという。ここで問題になるのは、北京語を用いない場合、タイヤル族と漢民族との間には、言語におけるコミュニケーションの障害が出ているのである。更には相手側は自分の分らない言葉で話す時には、まるで自分の悪口が言われているような感じがすると、彼らは言う。以上のようなギャップがあるので、どうしても違う民族は、友だちにはなれるが、信頼のできる友だちまでになるのは難しいのである。

㊦ 伝統文化に対する考え方

今日、台湾で提唱されている少数民族における伝統文化に対する意識を高めるということは、けして昔と同じように、はだしで歩き、着物を着ず、入れ墨をして、山林の原始生活をするのではない。つまり、物質的生活には現代科学技術を利用し、生活レベルをできれば時代の進歩に合わせ、礼儀、信仰、芸術、倫理などには適当なものを選択、継承していくことである。

小論では、神話、少数民族才芸コンテスト⁶⁾、山地歌謡、民族衣裳、民俗文物館、タイヤル料理、びくの学習意欲、民俗的誇り、伝統文化を発揚する意欲など10項目について、タイヤル中学生の伝統文化に対する考え方を考察した。例えば、山地歌謡に関して、タイヤル族は漢民族より好きなように見られる。民族誇りについては、漢民族よりよく民族の誇りを自覚しているように見える。ここで、興味深いのは、今回のアンケート調査に関して言えば、タイヤル中学生の言語における伝統文化に対する考え方の違いは、はっきりしていることである。次表2は家でよくタイヤル語を話している人とよく北京語を話している人で、以上述べた10項目についての相互関係表である。

統計によると、家でよくタイヤル語を話している人は全部で7名、よく北京語で話している人は全部で37名いる。それぞれ、前述したように伝統文化に関する10項目のうち、伝統文化に強く関心を持っている人（例えば、タイヤル神話に関しては、よくタイヤル神話を聞いたことがある。山地歌謡に関しては、山地歌謡がとても好きな人など）についてのパーセンテージを見ると、家でよくタイヤル語を話している人はよく北京語を話している人より、伝統文化に高い関心を持っている傾向にある。

表2 言語における伝統文化に対する考え方の違い

項 目	家でよくタイヤル語を話している (7名)	家でよく北京語を話している (37名)
タイヤル神話をたくさん聞いたことがある	1名 (14%)	6名 (16%)
少数民族才芸コンテストに参加することがとても好き	4名 (57%)	5名 (14%)
山地歌謡がとても好き	5名 (71%)	7名 (19%)
タイヤル族の民族衣裳がとても好き	4名 (57%)	2名 (5%)
民俗文物館に行ったことがある	7名 (100%)	36名 (97%)
民俗文物館に行って、とても有意義だと思う	4名 (57%)	17名 (46%)
家ではよくタイヤル料理を食べている	2名 (29%)	7名 (19%)
びくの作り方を大いに学びたい	2名 (29%)	6名 (16%)
自分の民族に誇りを大いに持っている	3名 (43%)	9名 (24%)
タイヤルの伝統文化を継承し、発揚する必要は大にある	2名 (29%)	6名 (16%)

タイヤル中学生にとって、タイヤル文化及び彼らの伝統文化に対する考え方は変化していくが、タイヤル族としての民族的バウンダリーは維持しており、タイヤル族としてのアイデンティティをも失っていないことが言えるだろうか。

七. タイヤル中学生をとりまく危機的状況と適応

これまで、多くの人類学者の調査で明らかにされたのは、少数民族が優位の文化に接する時、著しい葛藤、緊張、不適応が見られることである。⁷⁾タイヤル中学生にとっては、漢民族と同じ人生の成長過程における危機に加えて、少数民族と漢民族とが接触する時に起る不適応の危機的状況も数多く見られる。特に文化変容の過程において、彼らは伝統と現代化のはざまに生きていると考えられる。(例えば、前に述べたように言語、友人関係など)、このようなはざまに生きているからこそ、漢民族より役割葛藤が生じやすいと考えられる。例えば、小論では烏来の過去と現代における歴史、地理、経済生活、宗教信仰、親族組織から巫術の不思議な力、勇ましい男たちの狩猟、女の機織り、豊年祭の狂歡、入れ墨などは今日では行なわれていないが、これらはタイヤル族の人々の記憶に、今でも深く残っている。このような伝統文化に対するイメージは、漢民族の中学生にとっては、なかなか理解しにくい。しかし、現代化されていくうちに、タイヤル族の伝統文化はだんだん消えていくというのまぎれもない事実である。これについて、タイヤル中学生は自分の伝統文化がだんだん消えていくことを自覚している。彼らは言語から始まって、伝統的な器物の使用率が低くなってきたことに不安を感じている。

タイヤル語を例としてあげると、タイヤル語がだんだん消えていく今日のタイヤル社会では、中学生たちにはこのような流れを食止める力はない。しかし、北京語を排斥しないで受け入れて、漢文化

に同化して行くにつれ、その反動としてタイヤル文化の危機を意識し、自らの文化に目覚めることである。中学生にとって、漢人社会に取り込まれたいが、自分の言語を失いたくない。その焦燥感がはっきり現われると考えられる。つまり、伝統と現代化における役割葛藤である。タイヤル中学生にとって、この危機的状況を上手に乗り越えることが彼らの人生を意義あるものにするのである。

本章ではさらに進学、就職、人間関係の三つの側面からタイヤル中学生の適応について論じた。本校のタイヤル卒業生の進学率は高いが（1984年から1986年までの平均進学率は63%）、技術系と教育権に関する優先政策で作られた学校⁵⁾、及び軍事学校を中心としている。本校のタイヤル中学生は就職に困難はないが就職後の地位や人間関係における不適応現象が数多く見られる。少数民族が漢文化に接触する時、一番適応しにくいのは人間関係における適応である。その問題点は民族的先入観と自民族中心主義が考えられるのである。

結 語

以上小論での分析を総合すると、文化変容過程におけるタイヤル中学生の適応行動について、以下の三つの型が生じる可能性が考えられる。

1. 民族文化を離れた後の漢文化への適応

支配的な文化に適応することによって、自分の母村の民族文化を離れ、あるいは否定し、漢文化に入り込むことである。

例えば、第三章で述べたように、昔のような宗教信仰、巫術、親族組織における命名制度、成人式のシンボルとしての入れ墨など伝統的なタイヤル文化のある要素は、文化変容の過程において、本来のタイヤル文化から離され、否定され、消えてしまったのである。また、第六章で述べた着物に関しては、文化変容過程において漢文化と接触し、それによって、タイヤルの民族衣裳はだんだん消えてゆき、日常では全く用いられなくなった。今日では、民族博物館の演芸場でしか民族衣裳は見られない。

2. 民族文化と漢文化の平行的適応

支配的な文化に適応する際に、民族文化と支配的な文化両方を上手に保持し、両方が矛盾せず、併存することである。

今日のタイヤル社会を例として説明すると山地歌謡と国語歌謡、タイヤル料理と中華料理などの両方を上手に保持し、両方が矛盾せず、併存している。山地歌謡が好きだけれども、だからと言って国語歌謡を拒絶するということはなく、すんなり受け取っている。タイヤル料理が好きなら食べているが、同時に漢民族の中華風の中華料理をも拒絶しないというタイプである。

3. 民族文化を再評価する適応

支配的な文化に適応する際に、それを取り入れることによって、排斥ではないが、自民族文化を意識し、民族意識が却って生きていて、甦ることである。

例えば、第七章で述べたように、言語と伝統的な器物の使用率が低くなってきたことで自民族文化を意識し、民族的アイデンティティが却って生きていて、甦る。

— 注 —

- 1) Redfield, R. , R. Linton & M. J. Herskovits "Memorandum on the Study of Accultuation" *American Anthropologist* Vol. 38 pp149 - 151
- 2) 中華民國憲法168条参照する
- 3) 中華民國憲法169条参照する
- 4) 何 良 泉 『台北県立烏来国民中小学簡報』烏来国民中小学 1987 P1
- 5) 李 亦園 「他們本是快樂的民族」中国時報 1987. 5月2日 第8版
- 6) タイヤル族の豊年祭の代りに、烏来郷役所が年に一回主催する活動である。才芸コンテストは歌と踊りを中心としている。
- 7) 中西 信男 「異なる社会体制内の青年」
依田 新 『青年期の比較文化的考察』金子書房 1985 P200

重要な参考文献

- 綾部恒雄編 『アメリカ民族文化の研究』弘文堂 1982
- 綾部恒雄編 『文化人類学2 民族とエスニシティ』アカデミア出版社 1985
- 石田 雄 「アメリカ・インディアンのルーツとアイデンティティ」『UP』61号 東京大学出版社 1977
- 北村 晴朗 『適応の心理』誠信書房 1965
- 末成 道男 「台湾原住民」 梅棹 忠夫『世界の民族13』平凡社 1979
- 台湾日日新報社『番族慣習調査報告書』 1915
- 中西 信男 「異なる社会体制内の青年」 依田 新 『青年期の比較文化的考察』金子書房 1985
- 中根 千枝 『適応の条件』講談社 1976
- 丸山 孝一 「文化変容の過程」 蒲生 正男 ら『文化人類学を学ぶ』有斐閣 1975
- 宮本 延人 『台湾の原住民』文興出版社 1985
- 李 亦園 『台湾土着民族的社会与文化』 联経出版社 1982
- 李 亦園・許 木柱 「台湾高山族的現代適応問題」 *National Science Council Monthly*. Vol. 13 1985
- 余 光弘 『環山泰雅人的社会与文化変遷』台湾大学 1976
- 李 長貴 『変遷中的的山胞社会』東海大学 1971
- 廖 守臣 『泰雅族的文化 — 部落遷徙与拓展』世界新専 1984
- Gillin, J. P. 1948
The Ways of Men : An Introduction to Anthropolgy. New York :
Appleton - Century - Crofts
- Goodman, M. E. 1970
Race Awareness in Young Children.
New York : The Macmillan Co.

Herskovits, M. J. 1960

Cultural Anthropology. Calcutta : Dxford & Ibh Pub. ,

Keesing, R. 1981

Cultural Anthropology. A Contemporary Perspective Australia : CBS
College Press.

Rose, P. I. 1974

They and We. New York : Random House.